

# 聖マリア国際協力ニュース

第 105 号

平成 21 年 5 月 1 日発行

## パキスタン EPI / ポリオ対策プロジェクト

福岡県すこやか健康事業団 宮城裕人



EPI technician による予防接種

2008 年 10 月よりパキスタン国の EPI / Polio 対策プロジェクトに派遣され6ヶ月が過ぎた。パキスタンは世界でポリオが根絶されずに残っている4つの国（ナイジェリア、アフガニスタン、インド、パキスタン）の一つであり、ポリオ根絶が保健プログラムの大きな課題となっている。同時にポリオ以外の予防接種（麻疹、BCG、破傷風、百日咳、etc）の実施も遅れているため、JICA の支援により2006年9月より北西辺境州の3県（スワット、シャングラ、ブネール）を対象として定期予防接種支援の5年間のプロジェクトが開始された。

プロジェクトの主な活動の一つは、女性保健従事者（LHW）による予防接種の実施である。これまで予防接種は予防接種技師（EPI Technician）が行っていたが、コミュニティーの保健従事者である LHW に研修を行

い、予防接種を実施させることが活動の柱の一つである。その他の活動としては、予防接種技師への再研修、ゴールドチェーン整備、住民啓発、サーベイランス強化、ワクチン製造品質管理強化等の活動がある。これらの活動を通して予防接種を受ける小児の数の増加を目標としており、ひいては小児のワクチン予防可能疾患の罹患率、死亡率の減少を最終目標としている。

このプロジェクト実施上の最大の問題はタリバンの活動による治安の悪化である。2007年5月より対象県を含めた北西辺境州の治安の悪化によりプロジェクトスタッフの活動が制限されている。日本人スタッフは対象県での活動ができないため、現地スタッフを採用してモニタリング等の活動を実施しているが、やはり遠隔操作のプロジェクト実施では十分な成果をだすことが難しい状況である。スワット県に関しては、実質上活動を停止している。そのため、本年4月より対象県をハリプール県に拡大し活動を継続しているが、治安悪化による活動制限がある中、遠隔操作によりどこまでプロジェクトの成果を出すことができるか、その方策に苦慮している。

## 「南東欧地域 病院運営」フォローアップ協力

経営企画室 丸山正人、臨床工学室 井福武志



研修員との集合写真

当院の「南東欧地域 病院運営」の研修コースを修了し帰国した研修員を対象としたフォローアップ協力は、平成19年度に引き続き今回で第2回目となる。今回の目的は、セルビア国パリエポヘルスセンターにおいて「日本における診断

群分類別支払制度とそのデータ活用について」、「医療機器管理について」のレクチャーを行い、またセンターにおける運営管理面の改善事例等について、帰国研修員および病院職員との意見交換を通して、病院運営管理に対する意識改善を図ること。もう一つはマケドニアスコピエの医療機関へ供与された医療器材の稼動状況の調査と、次年度に計画されている1次医療機関対象の病院運営支援についての妥当性を調査することで、3月7日から15日迄9日間の訪問となった。



医療機器のメンテナンス記録

現地での平成20年度のフォローアップ協力は、セルビア国の人口54万人を含む2次医療圏の基幹病院と位置づけられたパリエポヘルスセンターにて開催された。今回の研修会で特に感銘を受けた点を述べると、2004年に当院での研修に参加されたパリエポヘルスセンター病院長のミリヤナ氏による研修成果の事例として、①IT化への対応 ②診療部門別のセンター化による運営 ③

医療機器の管理 ④看護師の機動力を重視した応援体制 ⑤基本理念と基本方針の策定、などが紹介されたこと。および、聖マリア病院における PFFC の活用事例の理解のもとに、それがパリエポヘルスセンターで応用され実行されている事例を目の当たりにできたことである。例えば、医療機器のメンテナンス記録や高額な医療機器の廃棄書類の作成や看護師の応援体制などの看護の機動力を育成するシスタークリニック制度（ICUでの看護技術力の向上）が導入され、また看護師の患者とのふれあいを重視したミニステーション利用による看護の質向上と意識変革への活動が実行されていた。

また、第1回のフォローアップで問題提起された事務管理主導での経営企画室の設置や、将来計画を目標にした事業計画・予算措置などを明確にした上で病院運営への取り組みも実行されている。研修2日目には帰国研修員により、南東欧地域における病院運営管理上の問題点や課題が提案され討議されたが、その内容は自分たちの国の医療提供体制を良くしたいという気持ちが伝わる内容であった。全ての点でとはいえないが、パリエポヘルスセンターではかなり質の高い病院運営管理が実施されている状況である。今後は当センターをセルビア国のモデル病院として、教育・研修を継続すれば、セルビアを含め南東欧全体の医療提供体制の発展に繋がる可能性が確信できた。（※右頁へ続く）

（※左頁より続く） そのためにも JICA および聖マリア病院での研修支援の継続が院長をはじめとして強く要望されている。

第2の目的であるマケドニアのスコピエ地域における医療機関の視察については、2年前からマケドニア国自らの医療提供体制に大きな変革があり、疾病の予防を重視した取り組みのために、「家庭医」としてのプライベートセクターが設けられていた。1次および1.5次医療機関の業務内容は、この家庭医からの紹介患者に対して検査診断を行い、入院治療の必要性がある場合には更に3次医療機関に紹介することである。無償資金協力で供与された機材稼動状況については、1次～1.5次医療機関においては大切に管理され、順調に稼動していた。一方、3次医療機関に供与された内視

鏡検査などの機材については13年を経過しており、使用不可能またはそれに近い状態であった。しかし世界銀行や他国からの援助、自前で資機材購入などによって、十分ではないが診断・治療業務は継続されていた。



おいしい肉料理

最後に、JICA では平成21年度のフォローアップ協力をボスニア・ヘルツェゴビナにて開催を予定しているようです。肉を中心とした食事で日本人好みの味付けなので、特に肉料理のお好きな方には協力支援への参加をお奨めします。

## ISAPH ラオス事務所の概要紹介

国際事業部 杉本孝生



活動を終え、関係者・村人との記念写真

平成21年2月22日から3月5日までの12日間、ISAPH の JICA 草の根技術協力事業「生き生き健康づくりプロジェクト」にプロジェクト管理（特に経理）の専門家で派遣されました。

派遣された目的は、プロジェクトの活動が期待される成果を上げ、目的を達成するための基盤となる管理体制（特に会計）の確立ならびにプロジェクト計画の実施状況を確認することでした。

私自身の現地での活動は確実なもので、説明してもあまり面白くないので、この紙面をお借りして ISAPH ラオス事務所の概要をお知らせします。

フ6人が参加しての大掛かりな活動です。

午前5時から準備が始まり、我々が到着した8時頃には、活動も終わりに近づき、お粥の配布を通じた栄養教育、衛生教育が行われていました。お粥の配布があることもあり、多くの母子が広場に集まり、かなり活発な活動が行われているという印象を受けました。また、郡保健局長自らがマイクを握り衛生教育、栄養教育を熱心に行っている様子は、この地区での活動がさらに順調に進んでいくような予感を覚えました。このようにラオス側と共に手を組み ISAPH が活動していけるのも、これまでラオスでの活動に従事された方々のご尽力の結果であると思います。

ラオスのフィールドには、これまでに聖マリア病院から8名の国際保健コース臨床研修医と7名のスタディツアー参加職員が訪問させていただきました。これからも、国際協力が興味を抱く職員が、国際協力に対する理解を深める場として活用させていただきたいと考えています。

5月1日現在の ISAPH ラオス事務所は、事務所代表者：岩田和子さん（長期 / 保健師）、技術アドバイザー：齋藤智子さん（短期 / 助産師）、事務所管理：藤倉友さん（長期 / 事務）の日本人スタッフ3人とラオス人スタッフ7人（写真の6名と Mr. ヴォンパン (Driver)）で、ラオス国カムアン県セパンファイ郡のシーブンファン地区、カンペータイ地区およびカシ地区において、カムアン県とセパンファイ郡保健局の医療スタッフの活動を支援する形で、活動を実施しています。ちなみに ISAPH ラオス事務所は、首都ビエンチャンから車で5時間、カムアン県の県都タケクにあります。タケクは隣国タイとメコン川を挟んだ国境の町で、小さなボートでタイ側から川を渡って入国することもできます。



Dr. フンコン (Manager)

Dr. ソンビット (Field Manager)

Ms. トック (Field Worker)



Ms. モン (Field Worker)

Ms. ルアン (Field Worker)

Mr. ラン (Driver)



手洗いの指導

2月25日シーブンファン地区ドンマークバー村で実施されているフィールド活動を視察しました。この活動は、セパンファイ郡保健局と ISAPH との協同作業により、健康教育、衛生指導、Growth Monitoring、EPI などのほか、お粥の配布（新しい試み）が実施されていました。

当日は、セパンファイ郡保健局長、保健局長以下、診療担当医師、妊婦検診担当、Growth Monitoring 担当、EPI 担当、薬品担当、運転士がモバイルクリニックチームとして参加、また ISAPH からは現地スタッ

## 今月の動き

- 【研修受入】
  - ・5月11日（月）～15日（金）
  - 国際医療協力研究委託事業からの依頼により、ベトナム医師2名を臨床検査室にて受け入れ、研修を実施。
- 【派遣】
  - ・5月20日（水）～7月19日（土）
  - 山崎裕章（国際事業部）；JICA 結核対策プロジェクトのためインドネシア国へ派遣。